

## 『莊子』教材考

— 漢文教材における意義をめぐって —

樋口 敦士

### 一 はじめに

漢文教材において『論語』・『孟子』といった儒家に比べると、道家や法家などの諸子の記載分量が少ない状況が見られる。益田栄次氏は一九七〇年代において既に「ほとんどの教科書が、『論語』より入り、『論語』に終わるという体裁にならざるを得ない」と嘆いたが、状況は現代でもあまり変わっていないように感じられる。儒学は既に明治初年に「仁義忠孝」を目的とした元田永孚の「教学聖旨」などの提言に端を発する「修身」の規範としての位置づけがなされ、特に徳育の面から国漢教材を支えてきた点が顕著であり、諸子は儒家の比較材料として用いられた経緯を有している。特に、老莊思想に至っては儒学の人為的な側面を否定して「無為自然」を説くが、この点は教育上どのような意義をもたらすのであろうか。平岡嘉泰氏もこの問題を直視して次のように述べている。

理想社会を目指し、個人の幸福を求めることで、儒家も老莊も期

するところ大きな差はないようにも思われるが、そこに至る具体的実践方法には大きな差異が認められる。しかし、百家争鳴の中で、常に儒家が優位を保ち、いつの世の人々にも容認されたために、老・莊の影は薄く、未知の存在でありアウトサイダーに終わっている。文字通り「和光同塵」としての存在なのである。<sup>(2)</sup>

これに対し、大久保隆郎氏は「儒学の発展は他の学派、特に道家の論理を吸収したことにあつた」<sup>(3)</sup>と述べ、荀子の合理論もその自然観は道家思想から批判的に継承したものであったと指摘する。このように、儒家の対立軸に置かれた道家の存在は、その思想や寓話などが後世に多大な影響を与えたことは否めない。また、老莊思想と一口に言われるが、老子と莊子の思想は必ずしも重なり合うものではない。老子はともすれば後ろ向きな姿勢で構えているのに対して、莊子はその境地を超越し、常に前向きな姿勢で世俗執着から逸脱した点に着目すべきだろう。本稿は莊子思想における教材的な意義を改めて捉え直し、次期学習指導要領の観点を踏まえながら考察するものである。

## 二 『莊子』採録教材の考察

莊子の経歴については『史記』に老子に付記する形で次のような記載が見える。

莊子は蒙人なり。名は周。周は嘗て蒙の漆園の吏と為り、梁の恵王、齊の宣王と時を同じうす。其の学は闕はざる所無く、然るに其の要は老子の言に本を帰す。故に其の著書十余万言、大抵は率ね寓言なり。漁父、盜跖、烙篋を作し、孔子の徒を詆訛し、以て老子の術を明らかにす。

（『老子韓非列伝』）

莊子は戦国末期に殷の遺民国家たる宋に位置する蒙で誕生したと伝わる。『莊子』三十三篇は内篇・外篇・雜篇に分類され、内篇のみは莊子自身が、外・雜の二篇は後人の手による作成であったと見なされている。本稿では『莊子』の教材的意義に焦点を当てるため、実作者についてはここでは問題にしない。

『史記』には楚の王から卿相に迎えられるも「犧牛」の例を持ち出して辞退した故事（列御寇篇）が紹介され、秋水篇の「曳尾於塗中」とともに有名な逸話であるが、大国への仕官を望まなかった姿勢が貫かれている。司馬遷も「老子の言に本を帰す」と記していることから、老子思想に立脚しているのは疑いないものの、その特異性には改めて焦点を当てる必要もあろう。儒家において孔子と孟子の思想が異なるように老子と莊子の違いについても様々な角度からの検証がなされている。金谷治氏は「老子ではなお現実世界での成功を目指す現実関心

が強いのに、莊子ではそれを全く乗りこえているということであろう<sup>(4)</sup>」と述べ、福永光司氏は、老子思想が「処世の智慧（現世的な生）」を問題にしているのに対して、莊子思想が「解脱の智慧（絶対的な生）」への方向性があると指摘して次の五点を挙げている。

- ① 老子の思想が政治への強い関心が持たれ、積極的な意欲が感ぜられるのに対して、莊子にはそれがほとんど認められない点。
- ② 老子の説く万物の根源としての静的な「道」の概念が転化し莊子が刻々と流転してやまない変化そのものを「道」と称する点。
- ③ 老子の後ろ向きな歴史観に対し、莊子には「時に安んず」、「時を心に生ず」といった前向きな歴史観が説かれている点。
- ④ 老子の外に対して向けられた「無為」の捉え方に対して、莊子は「生を忘れる」、「己を忘れる」のような内なる心に転ぜられている点（「無心」への視点<sup>(5)</sup>）。
- ⑤ 老子の流出的に説かれた宇宙生成論が、莊子の場合には認識論的な反省の色が加えられている点<sup>(5)</sup>。

このうち、高等学校国語科教材としては特に③、④の要素に重点が置かれている。日進月歩する現代において文明の利器に惑わされることなく、忘形の念を掲げて心に向き合うことを説いた点で『莊子』は最適な教材であることは言うまでもない。思春期に当たる年代の高校生は、とかく他者を過剰に意識した生活を送りがちである。彼らに向けて老莊思想を提示することにより、不安を和らげる素材となることは十分に考えられる。ただし、現状のままでは儒家の対立軸としての

諸子一派程度の扱いから脱することは難しい。ここでは、『莊子』から(一)「渾沌」、(二)「曳尾於塗中」、(三)「夢為胡蝶」の三つの定番教材を取り上げながら、その意義について順に考察する<sup>(6)</sup>。

### (一) 渾沌（未分化的世界観）

南海之帝為儻、北海之帝為忽、中央之帝為渾沌。儻与忽、時相与遇於渾沌之地。渾沌待之甚善。儻与忽謀報渾沌之德曰、「人皆有七竅、以視聽食息。此独無有。嘗試鑿之。」日鑿一竅、七日而渾沌死。  
(応帝王篇)

南海の帝儻と北海の帝忽が中央の帝渾沌の待遇を受けた際に、儻と忽は謝意を込めて「人には皆七つの穴があり、これによって生活ができるのに渾沌には穴がない。試しに穴を開けてやろう」と相談して、一日に一つずつ穴を開けているうちに渾沌は死んでしまう寓話である。初読の者には意図するところはわかりにくい部分もあるだろうが、現代の生活観を見つめ直すうえでは示唆に富むものになろう。「儻」、「忽」ともに「たちまち」の意となるのに対し、「渾沌」は「万物が未だ形成されておらず、陰陽の気がまだ分かれていない状態」である。つまり、自然状態のものに無理に人知が入り込んで文明化させることへの批判が内容からも明らかである。一般に、人は目、耳、鼻、口といった五官を用いながら外界の刺激を吸収するものであるが、こうした情報過多による刺激は人の本性を疲れさせるものにもなりかねず、原始状況においてこそ本性は保たれると説いている。物の始原に

ついで莊子は「古の人混芒<sup>こんぼう</sup>の中に在りて一世<sup>とち</sup>と与<sup>とも</sup>にして澹漠<sup>たんぼく</sup>を得たり」(繕性篇)と述べ、「渾沌」にやすらぎを見て肯定していた様子が窺える。そもそも「渾沌」は、古代の聖王舜が追放した「四凶」の一つに数えられた。「昔、帝鴻氏に不才子有り。義を掩ひ賊を隠し、好みて凶徳を行ふ。天下、之を渾沌と謂ふ」(『史記』『五帝本紀』)、同様の記述は『春秋左氏伝』『文公十八年』にも見え、「渾沌」には邪惡なイメージがつきまといつていた。この「渾沌」を、莊子は無垢なものとして万物の中心たる存在に読み替えたことになる。

前田利鎌は『宗教的人間』においてこの渾沌寓話は認識論のレベルから捉えるべきことを鋭く指摘している。

莊子によれば渾沌は非合理極るものであつて、結局は認識の明るみに将来し得ないものである。この非合理なるものを合理的認識の形に整えようとする刹那に、今まで生きていた渾沌は死んでしまふ。認識とはこの意味からすれば一種の殺戮行為と見做<sup>みな</sup>されるのである。認識論上から見ても、われわれに最も原本的な所与の実在内容は、非合理なる「異質的連続」である。しかし、かくいうこと、それ自身が已に一の知的加工を意味している<sup>(7)</sup>。

前田は莊子もまた真実在は矛盾によつて成立していることを主張していると説きながらも、対象を認識する行為とは同時に、それを破壊する行為でもあることを読み取っている。現行教材においては純粹無垢な対象物のみに焦点が当てられる傾向にあるが、認識という知覚が意味するものを生徒に意識させることは彼らにとって重要な意義を持

つものになろう。

## （二）曳尾於塗中（超俗的思想）

莊子釣於濮水。楚王使大夫二人往先焉。曰、「願以竟内累矣。」莊子持竿不顧曰、「吾聞、楚有神龜、死已三千歲矣。王巾笥而藏之廟堂之上。此龜者、寧其死為留骨而貴乎、寧其生而曳尾於塗中乎。」二大夫曰、「寧生而曳尾塗中。」莊子曰、「往矣。吾將曳尾於塗中。」（秋水篇）

楚の威王からじきじきの招聘を辞退する際に、宮中に祀られた「神龜」と塗中を生きる「泥龜」とのどちらの生き方が理想であるかを使者に対比的に選択させる寓話である。同趣の逸話に列御寇篇の「犢牛」がある。『史記』には齊の宣王や梁の恵王と同時代であつたことが述べられており、莊子の論客恵子は魏（梁）に仕えたとされる。この他に、莊子が趙の恵文王のもとで劇劍に夢中になる姿を諫めた話（説劍篇）からもおよその年代は算定されよう。魏で宰相に任ぜられた恵子に対し、莊子は漆園の吏という下役人として生計を立てていた。外物篇に見える「轍鮒の急」からは、時には友人に穀物を借りるような貧窮状況に見舞われることもあつたのかもしれない。こうした経済状況下では、論友恵子ですら警戒心を抱くに至る。官職が窺われることを恐れた恵子によそよそしい対応を察した莊子は「鷦鷯（高潔な鳥）は腐鼠（俗物）を顧みない」の寓喩を用いて論友の疑念を解いている（秋水篇）。宰相職までも「腐鼠」と呼び、大国の官位を一顧だにしな

い「泥龜」の視点は、読者に憧憬の念を起こさせる。俗世の価値観に縛られず、自己の天性を全うする態度はある種の爽快感をもたらしたはずであり、晋代の竹林の七賢による清談や陶淵明の漢詩などに大きな影響を与えた。我が国の江戸期の儒者もまた仕官に躊躇した際に、「泥龜」の語を引用してその精神の自由さに憧憬を覚えていた様子も窺える<sup>(8)</sup>。ただし、こうした自由精神への憧憬がいたずらに強調されることが必ずしも有効であるとばかりは言い切れない。教材において現実社会から目を背ける思想としての読み方の解説指導のみでは生徒から「夢想」としてあつさり切り捨てられてしまうことも懸念される。

## （三）夢為胡蝶（万物斉同論）

昔者、莊周夢為胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志与。不知周也。俄然覺、則遽遽然周也。不知周之夢為胡蝶与、胡蝶之夢為周与。周与胡蝶、則必有分矣。此之謂物化。（齊物論篇）

莊子が夢の中で胡蝶になるという逸話である。夢と現実の境目は、引いては生死の境界まで曖昧にする。生物にとつて生死は確かに重大事であるには違いないが、この世に生を受けた以上必ず死の影がつきまといつていることも事実である。それを甘受する一つの読み方を提示しており、死生への執着を超越して心に安らぎを与える意味も内包している。この單元にはまた、人間以外の生物との同一視への観点を開く方向性も示している。人はとかく自己を中心とした考え方にとらわれることが多いが、蝶のような卑小な生物に自身を投影することで、

別個の種にも意識を及ぼすことにもつながる。

蝶が莊周であるのか、莊周が蝶であるのか、主客の境界線はあやふやであり、絶対的なものではない。莊子は妻の死に際しても春夏秋冬の四時にたとえて達観する一方で（至楽篇）、知音恵子の墓を通り過ぎたときにはともに語るべき者をなくしたことを悼む姿を見せた（徐無鬼篇）。そこには死生を自然の摂理としてしつかりと受容している莊子の姿が窺える。さらに、至楽篇に見える夢中の髑髏との対話からは、死の世界が全く自由で天地生命と一体となっている場所であると悟る。結果的に「死生は命なり」（大宗師篇）ということになる。

『論語』では孔子が「古より皆死有り」（顔淵篇）と述べながらも、「未だ生を知らず、焉くんぞ死を知らんや」（先進篇）とその実情を打ち明けている。莊子と大きく異なる点は、「天命」を知っているはずの孔子が愛弟子顔回の悲報に接したとき、「噫、天予を喪ばせり」と身も世もなく嘆き悲しんだ点である（先進篇）。そもそも、孔子が「怪力乱神を語らず」の姿勢を取っていたためか、志怪小説などの怪異譚を除き、漢文教材には死そのものを真摯に直視する記述は多くない。文末の「物化」とは「仮象によって構成される相対的世界を超越し、絶対の境地へと飛翔すること」（筑摩書房『古典B漢文編』）と解されており、万物斉同の理念に通じている。自身の存在を悲観的に見る必要もなくなるが、それでは現世に生きる意味とは何か、このあたりの補足的な指導も必要になるものと思われる。

以上、現行の『莊子』教材を取り上げてその学習のねらいを考察した。いずれの寓話も人間における本性を重んじ、生死をも超越した心の持ち方を話題としている。物体の外観にとらわれず、心知を遊ばせる理念には生徒に精神的な豊穡さを与えるはずだし、儒家の一方的な教訓めいた主張よりも、粹から解放された自由な精神には共感を呼び起こすものとなろう。思想教材と言えば往々にして上意下達的な要素を帯びているのに対して、『莊子』は既成概念にとらわれず、反証的な要素を多分に含んでいることは明らかである。人知という思考の枠組みは曖昧で限定的なものとする思想は達観の先に超越者の姿を映し出す。しかし、いずれの教材も文明化の一途たどる実社会において現実を直視しているものと受けとることが難しい。この点を強調して指導した場合、生徒はその自由な精神に憧憬を持ちながらも、ある種の夢物語として受容することが懸念される。むしろ、これまであまり重視されてこなかった『莊子』の「論理思考性」にこそ新たな活用方法が見出されるのではないだろうか。

### 三 論理思考教材としての『莊子』

昭和三十五年及び四十五年に告示された「高等学校学習指導要領（国語）」には「思考力・批判力を伸ばし、心情を豊かにする」の指導目標があった。これを受けて鎌田正氏は漢文の目標と範囲について古典教育における漢文学習が時空を越えて存在する永遠性（すぐれた先哲が人生や社会、自然に対して述べた思想や感情）にこそあることに



触れ、老莊思想の「思考力の陶冶」については次のように説いている。

漢文は国文と異なる文章構造をもち、その思想の進め方においても独特なものがあり、さらに儒家、道家、法家など、それぞれに特異な思想を述べるとともに、その思想表現の様式を異にする。

たとえば道家における逆説などは、儒家の文章に見られない表現形体である。このような多種多様な思想や表現形体をもつ漢文教材を正確に読解する過程における思考力の訓練は、思考力の幅と深さを陶冶するに資することが大であり、数学の論証過程における論理的思考力の陶冶に劣らない重要性をもつものということができる<sup>(9)</sup>。

作品を通して社会や政治に対する思考力・批判力を陶冶することは、結果的に正しい社会の建設に役立つものと考えられ、漢文教材の目的の一つにはこうした能力に資することが掲げられていた。しかし、現在においても漢文の授業は講義型指導が中心であり、生徒が一方的に講義内容を咀嚼する状況下では思考・批判教材になることが難しいものと予想される。ここにこそ『莊子』の「論理思考性」に価値を見出すことができる。次に、いくつかの論理的な視点を取りあげて考察する。

#### (一)「無用之用」的視点

老莊思想には共通して「無用の用」の話題がある。老子のそれは定番教材であるのに対して、莊子の以下の箇所は現行教材での採録は見

られない。

・三十輻共一轂。当其無有車之用。埏埴以為器。当其無有器之用。鑿戶牖以為室。当其無有室之用。故有之以為利、無之以為用。

〔老子〕十一章「無用」

・山木自寇也、膏火自煎也。桂可食故伐之。漆可用故割之。人皆知有用之用而莫知無用之用也。

〔莊子〕人間世篇

両者を比較すれば、老子がいくつかの事例から「無用の用」を帰納的に命題化しているのに対し、莊子はこれを専門用語として引いていることがわかる。老子は車輪、家屋、容器における空間部分の価値の発見であり、莊子はこれをさらに発展させて、山木、灯火、肉桂、漆を例示して有用であるからこそ損なわれる現状を逆説的に明らかにした。さらに、恵子なる名家に属する論客との対話を通して、その「無用の用」のさらに広い応用をはかっている様子が窺える。恵子から「子の言は用無し」と言われた莊子は「無用」の価値についての再考を試みる。大きくも使用価値のない瓢箪や樗木の存在意義を話題にした逍遙遊篇や足場以外の土地が不要であるかどうかをめぐる外物篇の問答は有名である。莊子は、立脚地外周部分の有用性、瓢箪の浮力面での活用価値、樗木の天寿保全的側面といった別の視点からの再考を試みている。「用ゐるべき所無きも、安んぞ困苦する所有らんや——不要だと見なされてもどうして悩む必要があるのか——この一言には常識の範疇を見直す契機になるのみならず、各人の心に潜む不安感をも払拭する要素を含んでいる。定番教材である老子の「無用の用」に加

えて、莊子の「無用の用」を補完的に取り扱うことで既成概念からの脱却も期待できるだろう。

## (二)「認識論」的視点

他者の認識を持つことは可能であるかという命題がある。一部教材に採録されているが、莊子と恵子間をめぐる鯀魚（ハヤ）の楽しみをめぐる問答からは二つの異なった認識論が提示されている。

莊子与恵子游於濠梁之上。莊子曰、「魚出游従容、是魚之樂也。」

恵子曰、「子非魚、知魚之樂。」莊子曰、「子非我、安知我不知魚

之樂。」恵子曰、「我非子、固不知子矣。子固非魚也。子之不知魚

之樂全矣。」莊子曰、「請循其本。子曰女安知魚樂云者、既已知吾

知之而問我。我知之濠上也。」

（秋水篇）

莊子の「ハヤが気持ちよさそうに泳いでいる。これこそ魚の楽しみというものだ」と呟いた発言に対して、恵子「君は魚でもないのになぜ魚の気持ちがわかるのだ」と問い返す。魚が莊子ではないのと同様に、莊子は恵子でもないという理論を取り出して、その理論から言えは魚の気持ちに通じていると考えることも可能であると推論する。明治書院『古典B』の教科用指導書には「名家（論理学派）」と道家の思考法を鮮明に対照させた寓話である」としたうえで、名家が人間の立場から自然を認識すべく個々に分別して概念化したのに対して、道家たる莊子は「道」の立場から万物斉同の観点に立っていると解説している。この問答について郭沫若はこの命題に自身の反証を試みている

し、<sup>(10)</sup>物理学者の湯川秀樹はこの中に科学の合理性と実証性の姿を見ている。湯川はこの対話から、「実証されていないものは一切信じない」という認識と、「現時点で実証されていないものについては仮説としてこれを排除しない」という認識の違いを悟り、物理学の世界での応用を試みている。<sup>(11)</sup>名家の恵子との対話により莊子の理論はさらに磨かれたことだろう。こうした相反する認識論からは物事の両面性を照射し、自己の知見からは気づきえない新たな認識方法を与える。この単元教材は、他者との共感の可否という観点から新たな知見を開かせるうえで生徒にとって有効であることが結論づけられる。

## (三)「非公是論」的視点

『莊子』は儒家や墨家が各自の説を主張した百家斉放する時代においても「客観的真理（公是）」なるものはないと説いている。それを対話相手の恵子まで俎上に並べて明快に断じた一節である。

莊子曰、「射者非前期而中、謂之善射、天下皆羿也、可乎。」恵子

曰「可。」莊子曰、「天下非有公是也、而各是其所是、天下皆堯也、

可乎。」恵子曰、「可。」莊子曰、「然則、儒、墨、楊、秉四、与夫

子為五、果孰是邪。」

（徐無鬼篇）

狙わずに矢を命中する者を「羿」と見なし、各自の真理を信奉する者が「堯」と呼ぶことができるかどうかという論題である。この莊子の質問を受けて、恵子は「可」とのみ答える。莊子はそれなら儒家、墨家、楊朱（「為我説（利己主義）」を説いた）、秉氏（宋鉞、もしくは

は公孫龍（名家）に加えて「あなた（恵子）」までが真理を唱えることになるが、そうなる誰が客観的で公平な判断が下すことができるのかと反問する。ここでは羿、堯といった伝説上の著名人を掲げながら戦国時代の思想勢力図をあぶり出している。特に、各派それぞれの信条が異なるため決定することができないという観点には普遍性がある。現代社会においては通説が正しいとは限らず、多様な考え方が容認される必要がある。この記事は戦国時代という時代性を越えて普遍性を有した思想教材となることが期待できる。

#### （四）「記号論」的視点

『莊子』には個々の事物を俯瞰して抽象化している視点があり、こうした記号論にも着目できる。

以指喻指之非指、不若以非指喻指之非指也。以馬喻馬之非馬、不若以非馬喻馬之非馬也。天地一指也。萬物一馬也。（齊物論篇）

金谷治氏はこの箇所を「指（現実の指）」と「指之非指（概念としての指）」、「馬（現実の馬）」と「馬之非馬（概念としての馬）」と区分し、前者をもつて後者を説明するよりも、後者によって前者を説明するものを優位と解釈する<sup>12</sup>。現実の指や馬にとらわれていたのでは、現実を超えたものは明らかにできず、道枢の観点から眺めれば、天地も一本の指であり、万物も一頭の馬ということになる。

加地伸行氏は同時代の公孫龍の「指物論」（「物莫非指。而指非指」）を取りあげて、「物に指さすに非ざるは莫し。而れども指さすは指に

非ず」と訓読したうえで、「記号（指）」が「指示物（物）」を直接指すのではなく、人間の思考を経て形成された指示作用により「指示物（物）」に働きかける観念やその対象物の表現であったと解釈しており、指示作用に重視した点に着目している<sup>13</sup>。

具体的事物と上位にある抽象概念の二重構造についての意識は、高校生の年代の者にとつては必要な視点である。個々の事例を帰納して抽象化をはかる作業は論説文作成において意識しておかなくてはならない点である。可視的な現象面にのみ心をとらわれるのではなく、抽象的な原理へと至る視点を養成していくうえでこうした漢文教材が果たす役割は少なくない。

#### （五）『莊子』に天下篇命題を用いた実践

『莊子』における論理的な視点は大変重要ではあるが、その難解さのため必ずしも高校生になじみのある論題であるとは限らない。そこで莊子の論理性の実用に向けては末尾に置かれる天下篇に着目した。ここには、恵子との関連から「歷物十事」と言われる論題に加えて、他の詭弁家たちとの論争した二十一の命題が盛り込まれている。

卵有毛、鶏三足、郢有天下、犬可以為羊、馬有卵、丁子有尾、火不熱、山出口、輪不踞地、目不見、指不至、至不絶、龜長於蛇、矩不方、規不可以為圓、鑿不圍柄、飛鳥之景、未嘗動也、鏃矢之疾而有不行不止之時、狗非犬、黃馬驪牛三、白狗黑、狐駒未嘗有母、一尺之捶、日取其半、万世不竭。弁者以此与恵施相応、終身



無窮。桓圉、公孫龍弁者之徒、飾人之心、易人之意、能勝人之口、不能服人之心、弁者之囿也。惠施日以其知与人弁、特与天下之弁者為怪、此其抵也。

(天下篇)

ここには「卵有毛」から「一尺之捶、日取其半、万世不竭」までの二十一もの命題が列挙されている。一つ一つは三語から十数語の短文であり、それぞれが逆説に富んでいるため初心の生徒の関心惹起も期待できる。教員側からの説明を要さずとも生徒自身が自由な解釈を試みることが可能であると考えた。そこで、「諸子百家『命題』自己流解釈」と題して、稿者の勤務校（私立狭山ヶ丘高等学校）の高校三年生三クラス（計一〇一名対象）で実践を行った。右に掲げた各命題の書き下し文リストの中から四つを選ばせ、その意味するところを自由に解釈させたところ、生徒は気軽な気持ちで命題解釈に興味深く取り組んでいた様子が窺えた。生徒の作成した「自己流解釈」の中から一部を掲げる。

【各命題をできるだけ詳しくこじつけてみよう】

○「卵有毛（卵に毛有り）」

- ・「卵」にはもともと「毛」はないが、孵化、成鳥するうちに「毛」が生えてくるので、結果的に「毛」があると言える。
- ・「卵」には「毛」が生えていないのは一般的だが、自分が知らないだけでどこかにあるかもしれない。常に可能性を疑うべきこと。

○「犬可以為羊（犬は以て羊と為すべし）」

- ・「犬」と呼ばれる動物を「羊」と命名すればそう見なされること。
- ・「犬」にたくさん毛を生やすことにより「羊」のようにも見える。
- 「山出口（山は口より出づ）」

- ・現実の「山」は口から出ることはないが、言葉なら口にもできる。

○「目不見（目は見ず）」

- ・自然に備わった「目」では心情などの大切なものは見えない。
- ・互いに顔を合わせていても「目」は見合わさないということ。

○「亀長於蛇（亀は蛇より長し）」

- ・「亀」は「蛇」より寿命の点では長いものがあると言える。
- ・「亀」は死んだ後も甲羅を利用され、「蛇」の皮よりも長く保つ。

○「白狗黒（白狗は黒し）」

- ・「白」と言われるものは本当は「黒」いこと。
- ・人の色覚により「白狗」を「黒」と感じることもありうる。
- ・「白狗」より白いものが存在すれば相対的に「黒」くもなること。

生徒自身が恣意的に解釈しているものもいくつか散見されたものの、概ね他者への説得力を持つように論理性につとめた様子が窺われた。特に、印象的だったのは理系生徒が眼球の断面図や数式を用いて楽しみながら解釈に取り組んでいたことである。総じて物事の名称は実体とは必ずしも一致しないという状況を体感しながら、文理を問わずこの命題解釈には生徒の関心が寄せられた結果が得られた。

以上、『莊子』の中から名家的な見解で俯瞰した。名実論という観点は漢文教材においてはあまり扱われることは少ないが、実体と名称が乖離する状況は現実社会においてしばしば見られる。こうした視点こそ授業の現場で生徒の思考力、批判力の陶冶に大きく資することは言うまでもない。莊恵問答の直接的な対話から、論点が可視化され、常識にこだわらない新しい見解が生じることも期待される。こうした対話形式をとっている逸話には莊子と同時代の恵子に加えて、時代を異にする盗跖や老子の口を借りた孔子批判（盗跖篇・天運篇）である。ただ、莊子は素直に「已んぬるかな、已んぬるかな。吾、且た彼に及ぶを得ざらんか」（寓言篇）と嘆じて素直に脱帽する記述も見えるため、その人格を必ずしも貶めることが目的だったのではなく、あくまで論敵相手の一人として孔子を選んでいるに過ぎない。以上の点から、『莊子』には莊子自身もしくは代行の人物を登場させて、対話を通して相手との交流に臨んでいる点には留意したいところである。

莊恵問答からは通念に対する反証作業が読み取られ、こうした視点からの思考力、批判力の育成はディベート能力に有機的に結びつくことになる。しかし、これとは逆に討論に対して懐疑的な寓話も斉物論篇にはある。二者間の討論では当事者間には中立な判断を下すことができないのもちろんのこと、第三者の介在があってもそれが不可能である原理が述べられている。つまり、第三者的な判断も結局はどちらかへの加担か、もしくは新説の提示に過ぎない原理をあぶり出した（「然らば則ち我と若と人と、俱に相知ること能はず」（斉物論篇））。

討論で相手をいかに論破しようとも、多数決が罷り通ろうとも、それが必要しも真を突くものではないことを訴えている。こうした価値観は高校生には新鮮に映り、世間一般の通念が必ずしも正当とは限らない点は学問的な見地を開かせることにも通じる。さらに、莊子は言語の持つ不安定な要素にまで踏み込んで「言語は風波なり。行は実喪なり」（人間世篇）と述べるばかりではなく、言語自体が持つ不要さにも切り込んでいる。

筌は魚を在るる所以なり。魚を得て筌を忘る。蹄は兔を在るる所以なり。兔を得て蹄を忘る。言は意を在るる所以なり。意を得て言を忘る。吾、安くにか夫の忘言の人を得て、之と与に言はんかな。

（外物篇）

「筌蹄」とは漁狩に使う道具であるが、どちらも獲物が手に入ったら忘れてしまうものである。言語もまた気持ち伝える道具であり、手段にしか過ぎない。この「得魚忘筌」の語は手段が目的化し、必要以上に言葉を飾り立てる人が多い現状を嘆いたものである。

このように莊子が「公是（客観的真理）」の存在を否定し、反証にとめながら、名実の乖離に着目していた点には留意したいところである。討論を重ねながらもそれすら絶対視することなく、言語の不要さにも切り込んでいる点は現代に生きる我々にとって大きな示唆を与えてくれる。莊子が名家の恵子との論戦を楽しみながらもその間で交わされたロジックや言語万能観の否定への警鐘が描かれている点は国語教材として大きな示唆に富むものであろう。単なる現実逃避的

な姿勢のみではなく、物事の持つ両面性に焦点を当てることで、莊子の論理はいつの時代においても新たな視点を与え続けることになる。

#### 四 『莊子』の国語的観点

##### ―次期学習指導要領に照らして―

平成三十年三月に次期「高等学校学習指導要領」が告示され、「主体的・対話的で深い学びの実現」（第1章総則）が謳われた。この中には子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の思想を手がかりにすることなどを通じて、自己の考えを広げ深める「対話的な学び」や、各教科等で習得した概念や考え方を活用した「見方・考え方」を働かせ、問いを見出して解決したり、自己の考えを形成して表現したり、思いをもとに構想、想像したりすることに向かう「深い学び」の実現を目指す方向性が盛り込まれている。「対話的な学び」において期待されるのは次の三つである。テキスト理解により生じる〈テキスト（筆者）との対話〉、他者との対話による理解の深化（他者との対話）、前記二つの対話を経て自問自答に至る〈自己内対話〉である。

河野順子氏は学習指導要領の改訂を見据えて、対話を深めていく観点からも生徒が根拠となる言葉や文にこだわり、既有知識による理由付けをする態度を重視している。特に「論理的思考力・判断力の育成のためには、既習教材などを活用しながら、新たな論理を学んでいくための「批評読みとその交流」という方法が必要である」と述べ、切実な自己内対話を生じるためにも「根拠―理由付け―主張」の三点

セットは生徒にリアルで実感的な学びを与えることを検証している。<sup>(14)</sup>

道家を掲げる莊子は漠然と「無為自然」の世界に安住することなく、常に通説に批判的な態度をとる。時として物事に反証を加えるその姿には従来の価値観にとらわれず、新しい見解を生み出すエネルギーが満ちあふれていた。莊恵問答や孔子逸話における対話には、両者の言い分を通じて読者に判断を委ねる態度も窺える。特に、恵子とのやり取りの中には「無用の用」をはじめとする命題的な項目が多分に盛り込まれており、言語活動に適した教材であることは言うまでもない。

莊恵問答を例に取って「対話的学び」について考察したい。「魚の楽しみ」や「無用の用」などの命題をテキストに取り（テキストとの対話）、その認識論的是非をめぐって恵子と応酬しながらも（他者との対話）、斉物論篇や外物篇などからは討議自体の正当性や言葉の存在意義についても懐疑的な見方の提示（自己内対話）に至ることがわかる。このようにある課題から生じたテーマについて莊子と恵子は対話を持っている。一見すると恵子を論破しているように映るが、討論や言語などにも懐疑の念を抱いていることから、さらに深いところで自身を省察していることがわかる。

『莊子』教材で見過ごしてはならない点は、その寓言的な故事成語の豊富さである。「井蛙の見」、「轍鮒の急」、「白駒隙を過ぐ」、「螭螂の斧」、「蝸牛角上の争い」、「木鶏」、「大鵬」、「朝三暮四」などあまりにも日常的に使用されているため見過ごされがちだが、こうした動物を用いた成語が多いことも『莊子』の特徴の一つである。巨視的な俯

瞰により全貌の把握につとめるものが多くあり、その寓話の妙が窺える。これらは故事成語そのものとして受容されるばかりでなく、こうした語彙への視点は表現のうえで相手に効果的に伝達する手段において有効になるはずである。

前掲鎌田氏の指摘にもあつたようにかつて漢文教材は「思考力」や「批判力」が求められていたが、近年では佐藤正光氏も「漢文教育の今日的な意義」として「批評力」の必要性を説いている。

漢文教育で言えば、教材の批評力を身につけることは重要である。批評力を身につければこそ、生涯にわたって愛好できる作品を自ら鑑賞し、他者へもその価値を説明できる能力を育くむことが可能なのである。<sup>(15)</sup>

こうした観点からも『莊子』の論理思想的な要素が今日の国語教育における思考、判断、表現の分野において幅広く資する教材として適したものであることは改めて言うまでもない。

## 五 まとめとして

思想教材において『論語』の人生訓や『孟子』の性善説に焦点が置かれがちであり、老荘思想は取り扱いきくいという見方もなされてきた。確かに、思想教材はとかく処世訓が多く並び、「いかにして生きるか」を説くことが多いため、現実から目を背けて逃避的な態度をとる教材は説明に窮する場面もあろう。「莊子」はとかく「無為自然」や「死生観」による物質に毒されない精神的なやすらぎを説く面には

かり注目が集まるが、この教材が有する現実を鋭く突く視点を見出すことはできない。『莊子』の哲学は難解であり、全貌を明らかにすることは限られた授業時間の中では難しいが、この教材の有する論理的な命題に焦点を当てることで、思考を鍛える材料ともなろう。

一方で、莊子の知音にして論敵の恵子は名家に属し、両者間の対話を言語活動の先例として見ることも可能である。莊恵問答の中には「対話的な学び」の要素があり、互いの立場から偶発的な話題を提供し、寓話を用いた説得力を持った応酬には既有知識に訴えかける恰好の材料である。平成三十年告示の次期学習指導要領には「深い学びの実現」が盛り込まれ、「思考・判断・表現」が改めて求められるようになった。『莊子』には「無用の用」をはじめ、名家からの影響を受けたとおぼしき多くの命題など話題性に豊富である。論争を重ねながらも討議や言語を絶対視しなかったこともまた含蓄に富んでいる。さらに、『莊子』を典拠とする故事成語には人口に膾炙したものも大変多いことから、思想そのものとは離れたところからの愛着もある。その寓話性からは語彙の獲得や表現力の向上も期待できる。定番教材では精神的解放に焦点が当てられがちだが、こうした点にも配慮しながら、『莊子』教材のさらなる活用を見出して指導することが必要である。

注1) 益田栄次「教材篇 三、思想」一一一頁。（鎌田正篇『漢文教育の理論と指導』大修館書店 一九七二年二月）

- (2) 平岡嘉泰「老子、莊子は教えにくい教材として取り上げる際の指導法等について」(『国語通信 東書国語』三〇三号 東京書籍一九九〇年六月)
- (3) 大久保隆郎「漢文教育の指導と目標 二、思想教材の目標(道家の思想)」一八頁。(前掲(1)所収)
- (4) 金谷治『莊子 第一冊「内篇」』『解説』七頁。(岩波書店 一九七一年十月)
- (5) 福永光司『新訂中国古典選七卷 莊子 内篇』『解説』一一～一三頁。(朝日新聞社 一九六六年四月)
- (6) 佐野泰臣は一九七〇年代当時「古典I乙」において上記の三つの单元が多く採録されている現状を報告している。(『漢文教育考―その指導と実践―』教育出版センター 一九七八年一月)
- (7) 前田利鎌「莊子の認識論と客観的実在」一五九頁。(『臨濟・莊子』岩波書店 一九九〇年八月/初出『宗教的人間』一九四九年二月)
- (8) 江戸の儒家の文章では、松永昌易の「泥亀の尾を洩くを慕ひ、出仕を欲せずして、処士に終る」(『松永尺五先生集』)、西山拙斎の「雨霽れ泥亀偏へに尾を曳く」(『拙斎遺文抄』)などの用例が見える。
- (9) 鎌田正「漢文指導の目標と範囲」一一～一三頁。(増淵恒吉ほか編『高等学校国語科教育研究講座第十一卷漢文』有精堂出版 一九七四年十月)
- (10) 郭沫若「名弁思潮的批判」二八二頁。(『十批判書』東方出版社 一九九六年三月/初出 一九四五年一月)
- (11) 湯川秀樹「知魚楽」(『ちくま哲学の森六卷 驚く心』筑摩書房 二〇一二年二月)
- (12) 前掲(4)五九頁。
- (13) 加地伸行「指物論解釈」一六二～一六三頁。(『中国論理学史研究 経学の基礎的研究』研文出版 一九八三年七月)
- (14) 河野順子「思考力・判断力を育てる「批評読みとその交流」の学び」四～九頁。(『月刊国語教育』五五一号 二〇一八年三月)
- (15) 佐藤正光「漢文教育の今日的意義」九頁。(『日本語学』第三十六卷第七号・通卷四六八号 二〇一七年七月)